

『晚晴吟社詩』注釈と補論「詩語」「閑権」について

山口 旬

はじめに

『晚晴吟社詩』は、江戸後期を代表する漢詩人の一人である柏木如亭が寛政七年（一七九五）年に信州中野に開いた漢詩結社、晚晴吟社の社友の漢詩を集めた小アンソロジーである。七絶八首、五律三首、七律一首、計十二首を収め、各首に大窪詩佛の評語を附けて、寛政十二年（一八〇〇）秋に刊行された。

『晚晴吟社詩』の刊行の経緯に関しては、如亭による本書の跋文と、同じく寛政十二年に刊行された大窪詩佛の『詩聖堂百絶』にも収録する序詩とその序にほぼ同様の記述がある。『詩聖堂百絶』には「題晚晴吟社卷首并序」として、「予、柏永日を信濃に訪ふ。其の徒、木百年・高聖誕が輩十有余人の詩を得て、批評・輯録して、計らず巻を為す。携へ歸りて都下の社友に示さんと欲す。因て謀りて梓に上す。名づけて『晚晴吟社詩』と曰ふ。晚晴は、永日の齋名なり。」（原漢文）とある。大意は「私、大窪詩佛は柏木如亭を信州に訪ねた。如亭の門人である木百年・高聖誕など十数人の詩を得て批評・編集するうち、思いがけないことに一卷となった。これを江戸に持ち帰り江戸の詩

仲間に見せようと思ひ、相談の上、出版した。題名を『晚晴吟社詩』という。晚晴は如亭の書齋の名である。」である。如亭の門人の詩に對して盟友詩佛が評語を附けたという形式だが、直接の門人たちの詩であるから既に如亭の目は通して添削済みであったということだろう。

このような地方詩社におけるアンソロジー刊行にはどのような意味があるのだろうか。柏木如亭は所謂生粹の江戸っ子であり、当然、江戸詩壇で活躍していたが、遊歴と流落の為に地方での活動が多くなっていた。中央で起こった清新性靈派の新進詩人として歓迎されたことであろう。それによって地方の詩壇が活況を呈しアンソロジーを出すほどにまで力を持ったのは、中央と地方の問題として注目される。更にこの社友の内から木百年と高聖誕の二人は個人詩集まで出版する。百年の『静窓詩』と聖誕の『紅葉遺詩』である。また、如亭は二人の協力も得て吟社における漢詩作の教科書というべき『詠註聯珠詩格』も出版し、地方詩壇の完成形を見せる。アンソロジー刊行はその一段階である。^{（注1）}

また、本書の特徴に一首ごとに附された詩佛の評文がある。ごく短文ではあるが、当時の詩佛や清新性霊派の詩の理論がうかがえて興味深い。^(注2) また、職業詩人が門人格の素人詩人にどのように批評を加えるかの技術も見られる。純粹に文学的批評ではなく指導としての批評というのに近い。長所を引き出そうとする匙加減が指導者の技術の見所である。

また、詩と評語の対等な組み合わせという形式は、詩佛の『卜居集』における詩佛の詩、中野素堂の評の形式と共通するのも興味深い。この形式はこの二書の他にあまりない珍しい形式だからである。

大窪詩佛の序詩 その1

【本文】

霜早山村秋欲殘 霜 早くして 山村 秋 残せんと欲す
 詩愁不似客愁寬 詩愁は似ず 客愁の寛きに
 晚晴堂畔葉如錦 晚晴堂畔 葉 錦の如し
 留與遊人自在看 遊人を留与して自在に看せしむ

【訳文】

山中のこの村では、霜の降りるような寒気が早くもやって来て、秋も終わろうとしている。そんな気候でも、旅の愁いは感じることもなくゆつたりと過ごしているが、詩を選ぶ愁いはなくならず悩みが絶えない。如亭の晚晴堂の周りでは、詩という葉がどれも錦のように美しく色づいていて、旅人である私をここに引き留めて、好

きなだけ見せてくれるからだ。

○霜早山村秋欲殘 杜牧の「山行」詩のイメージを借りる。詩佛の信州中野訪問は跋文によると庚申(寛政十二年)の秋とある。そして留宿数十日に及ぶのである。○詩愁 宋詩、なかでも楊誠齋に多く見られる語である。大窪詩佛の『詩聖堂百絶』にも四例ある。^(注3) 多くは所謂「苦吟」のことである。作詩や推敲や添削など詩に関わる苦勞・悩みを指すと思われる。例えば、「鳧鷖行中脱病身、竹林深處得幽人。只言官滿渾無事、也被詩愁攪一春。」(題所寓唐德明書齋・宋・楊萬里)など。ここでは、自身の詩作ではなく、それぞれ錦のような詩の作品群を批評する悩みであろう。○晚晴堂 柏木如亭の信州中野における書齋。○葉如錦 「遠上寒山石徑斜、白雲生處有人家。停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花。」(山行・唐・杜牧)のイメージによる。○留與遊人 遊人は詩佛のこと、留與は詩佛の信州中野滞在が数ヶ月にも及んだことをさす。◎上平声十四寒・七絶。

大窪詩佛の序詩 その2

【本文】

一鼻清茶一炷香 一鼎の清茶 一炷の香
 手開詩卷細平章 手から詩卷を開て 細に平章す
 自嗤身與蜂媒似 自ら嗤ふ 身は蜂媒と似るを
 品白評紅盡日忙 白を品し紅を評して 尽日 忙し
 詩佛題(印)

【訳文】

一つの茶釜には清らかなお茶、そして一くゆりの茶の香り。そんなところで、自分の手で詩巻を開けて、細かく品定めし批評している。そうすると自分でおかしくなって笑ってしまうのだが、私はまるで受粉に忙しく飛び回る蜂にそっくりだと思ふ。白い花が良いと言ったり、紅い花が良いと言ったり一日中飛び回って大忙しなのだから。

○一鼻 「鼻」は鼎の異体字。「詩聖堂百絶」では「一論」とする。「晚晴吟社詩」と「詩聖堂百絶」の刊行はほとんど同時期であるが、序詩より詩集が先行するとは考えにくいため「論」が決定稿であろう。

○清茶一炷香 「清香一炷茶一啜」（維那觀師以偈示余求詩爲贈因成兩絶句其一・宋・孔武仲）などの類句がある。如亭の跋文の「一香一茗」と呼応している。○手開詩巻細平章 平章は、品定めをする。結婚の仲介をする。「平章風月歸茶鼎、管領烟霞付酒杯。」（盤園・宋・馬廷鸞）○自嗤身與蜂媒似、品白評紅盡日忙 如亭が信州中野での漢詩教授用に作った「訳註聯珠詩格」に劉後村「蜂媒」があり、類想句に「為花評品嫁東風」がある。蜂媒は、花の間を飛び回る蜂の仲人。○下平声七陽・七絶。

◎序文にあたる部分だが、詩佛は絶句一首でそれに代えている。後年、あまり散文を書かなかった詩佛だが、この時期に既に『詩聖堂詩話』など散文の著作もあり、必ずしも散文を不得手にしていたわけではない。小規模のアンソロジーであることと、読者層（晚晴吟社の門

人達を想定したであろう）を考えて、また評語が散文であるので逆に詩を序にしたのであろうか。

1 早秋 景道人

【詩・本文】

幾樹秋風水有聲 幾樹 秋風 水に声有り
滿天涼露夜三更 滿天の涼露 夜 三更

幽窓夢破難重寐 幽窓 夢 破れて 重ねて寐ね難し
直到月低河又傾 直に月の低きに到て 河 又 傾く

【訳文】

秋風が幾本もの樹木に吹いて天の川から水音がするようだ。真夜中になると、冷たい露気が空いっぱいに満ちてくる。静かな書齋では、一度夢から目が覚めてしまうと再びはなかなか寝つけないでいる。見れば、すでに月も落ちており、銀河もまた傾いているのであった。

○景道人 須田勤子稷。善光寺の医者。○直到月低河又傾 直は、

夢から覚めたので途中の経過は知らないが、のニユアンス。河は銀河、天の川。○下平声八庚・七絶。

【評・本文】

儂爽簡達超然塵壒之外。水有聲三字有味。不可容易看過。
（儂爽簡達、超然として塵壒の外なり。「水有声」の三字、味有り。容易に看過すべからず。）

【訳文】

すつきりと簡潔で明解な表現で、内容は超然として俗世間からかけ離れている。「水有声」の三字に味がある。そこを簡単に見過ごしてはいけない。

○儻爽 儻は俊に同じ。「俊爽」は高くすつきりしている。○簡

達 簡略で意味が十分通じること。○塵壙 壙は壙、つちけむり。

塵埃と同じ。○有味 味とは、水と河が呼応しているということ

をさすか。

◎門人格への批評は直接的ではなく賞めながら問題点を指摘するというようなやり方になる。

2 山家 藤義敦 自厚

【詩・本文】

野竹丘松自作扉 野竹丘松 自ら扉を作す

四山如洗画屏圍 四山 洗ふが如く 画屏 囲む

寒窓昨夜三更雨 寒窓 昨夜 三更の雨

溪水今朝一尺肥 溪水 今朝 一尺 肥ゆ

【訳文】

野や丘の竹や松が自然に我が家の扉となっている。四方の山々は、緑が雨で洗われて画を書いた屏風のように我が家を取り囲んでいる。寒々とした書齋で昨夜は夜中に雨音が聞えていたが、今朝見れば、谷川の水が一尺ほども増していた。

○藤義敦 自厚 未詳。○野竹丘松 野竹丘松。互文。○自作

扉 作者未詳の類句「野竹自成扉」が中国岩泉寺の石壁に刻されて

いるという。○四山如洗画屏圍 如洗は緑が洗うように、の意。

○寒窓、溪水、○評文に見えるように韓偓や范成大の影響下の対

句。◎上平声五微・七絶。

【評・本文】

三四意思真率。韓偓三更聯石湖三寸對、皆却壓倒焉。

(三四、意思真率。韓偓の三更聯、石湖の三寸對、皆な却て圧倒す。)

【訳文】

三四句は、思いが率直で飾り気がない。韓偓の三更の聯や、范石湖の三寸の對を参考にしてはいるが、どちらも逆に圧倒する出来映えである。

○韓偓三更聯「昨夜三更雨、今朝一陣寒。」(懶起・韓偓)韓偓は韓偓。

香奩体で知られる晩唐の詩人。○石湖三寸對「昨夜榕溪三寸雨、

今朝桂嶺十分寒。」(送周直夫教授歸永嘉・范成大)「卜居集」「山居

十首」詩で詩佛自らも使い、中野素堂の評にも范石湖の對を圧倒す

るとある。范成大は南宋の詩人。当時非常によく読まれ手本にされた。

○壓倒 韓偓や范石湖を圧倒するという理由は、昨夜の雨から今朝

の寒さという必ずしも論理的につながらない對に対して、本詩は雨に因って溪が増水するという二句で一意を表わす流水對となっているためであろう。

3 夜歸 秦壽足

【詩・本文】

釣筒取得下苔機 釣筒 収め得て 苔機を下れば

柳蔭深中螢火飛 柳蔭 深き中 螢火 飛ぶ

雨後輕風冷如水 雨後の輕風 冷 水の如く

滿衫露氣帶秋歸 滿衫の露氣 秋を帶て帰る

【訳文】

釣り竿をしまつて、苔の生えた水辺の岩から下りてくると、柳の蔭が深いところに螢が光を放つて飛んでいる。雨上がりの微風は水のように冷たく、着物いっぱい露気、つまり秋を帯びて帰ってくるのだ。

○秦壽足 未詳。 ○釣筒 釣り竿を指す。 ○苔機 機は磯か。

水際の石の多いところ。 ◎上平声五微・七絶。

【評・本文】

詩境清淡。三四、尤佳。使讀者意志爽然。

(詩境、清淡。三四、尤も佳なり。読者をして意志爽然たらしむ。)

【訳文】

詩境は清らかで平淡である。三句めと四句めが非常に優れている。読む者の気持ち爽やかにしてくれる。

○清淡 平淡は詩の理想的な境地である。 ○三四 転句と結句を

さす。

4 送人北遊 澤照中 午窓

【詩・本文】

惜別相傾酒數杯 惜別 相傾く 酒 數杯

離愁直被曉鐘催 離愁 直ちに曉鐘に催さる

杖鞋歸日詩千首 杖鞋 歸日 詩 千首

收拾北方山水來 北方の山水を收拾し来らん

【訳文】

別れを惜しんで數杯の酒をとくに傾けていると、悲しいことにあるという間に曉の鐘が鳴り出発を促される。杖と草鞋の旅姿の君がまたここに帰って来る日には、千首もの詩を作つて、その中に北方の山水の名勝をみな集め尽くして来るのだろう。

○送人北遊 人の北遊するを送る。作詩事情は不明。 ○澤照中

窓 未詳。 ○離愁 別れの悲しみ。 ○直 夜を通り越していき

なり朝になったようなニュアンス。時をうつさず。 ○杖鞋歸日詩

千首 送別詩に類想が多い。「此行定有詩千首、莫惜因風寄數編。」(再

用韵送安國・宋・王十朋、「西歸定有詩千首、想肯重來賣一丘。」(韵

送程給事知越州・宋・王安石) など。 ◎上平声十灰・七絶。

【評・本文】

此友人亦必有斡旋千鈞之筆力。

(此の友人も亦た必ず斡旋千鈞の筆力有らん。)

【訳文】

この詩で送つた友人もまたきつと筆で千鈞もの荷を動かす詩の力

があるのだろうか。

○幹旋 めぐらす。回すこと。字をめぐさせること。 ○千鈞之筆

力 筆力千鈞。鈞は、目方の単位。周代の一鈞は七・六八キログラムという。千鈞は非常に重いこと。千鈞の重さ。非常に重い物を筆の力で動かすこと。

5 初秋 條耕 春田

【詩・本文】

梧桐葉上雨餘風 梧桐葉上 雨余の風

一味新涼曉色中 一味の新涼 曉色の中

秋信不知何處早 秋信 知らず 何の処か早きを

庭前已染鴈來紅 庭前 已に染む 鴈來紅

【訳文】

梧桐の葉の上を雨上がりに風が吹き過ぎると、明け方の風景の中に一味の新たな涼が生まれる。秋の便りが来るのは何所が一番早いのだろうか。庭の前で既に紅に染まっているハゲイトウだろうか。

○條耕春田 未詳。 ○梧桐葉上雨餘風 梧桐の葉に雨があたると

は、秋の風物。 ○一味新涼曉色中 「數日無人到、秋風一味涼。」(秋

日園林即景、清吳宗愛) ○鴈來紅 「雁來紅」ハゲイトウの漢名。秋、

雁の来る頃、紅色になるからいう。 ◎上平声一東・七絶。

【評・本文】

情致雖纖工、而嚴然生靈之詩也。格調之徒、不能復夢見。

(情致、織工と雖ども、而して嚴然として生靈の詩なり。格調の徒、復た夢見ること能はず。)

【訳文】

おもむきは繊細で巧みであるが、嚴然として性靈清新派の詩である。格調派の詩人にはまた夢見ることできない世界であろう。

○情致 風趣。 ○織工 技巧的であるが、技巧から生まれた表現

でなく現実の観察からできた詩であることをいっている。 ○生靈

之詩 生靈は性靈。当時流行していた、現実主義的な性靈清新派風

の詩。 ○格調之徒 一時代前に流行した擬古の古典主義的な古文

辞格調派を信奉する詩人達。

6 無題 柏位 立人

【詩・本文】

寒水溶々綠滿塘 寒水 溶々 綠 塘に満つ

蓮枯無葉掩鴛鴦 蓮枯れ 葉の鴛鴦を掩ふ無し

多情不奈年光減 多情 年光の減ずるを奈んともせず

無限西風又夕陽 無限の西風 又 夕陽

【訳文】

冷たい冬の水が盛んに流れて、緑の水が池に満ちている。蓮もすっかり枯れてしまったので、鴛鴦を掩い隠す葉もない。歳月がすり減るように減っていくのをどうすることもできず、胸がいつぱいになる。西風は無限に吹き続けているが、一日の終わるのは早く、もう

夕陽の時刻なのだ。

○柏木立人 柏木立人。柏木如亭の弟。 ○寒水 冷たい水。 ○

溶々 水の盛んに流れるさま。 ○緑 水の色。 ○塘 池。 ○

蓮枯 枯蓮（かれはす）は冬の季語。 ○年光 年月。 ○無限西

風又夕陽 「夕陽無限好、只是近黄昏」（樂遊原・李商隱） ◎下平声

七陽・七絶。

【評・本文】

立人之詩以流麗為工、與阿兄永日異法。如此詩是也。然韻絶趣絶、無元人孀弱之氣象矣。

（立人の詩、流麗を以て工と為し、阿兄永日と法を異にす。此の如き詩、是なり。然れども韻絶、趣絶にして元人孀弱の氣象無し。）

【訳文】

立人の詩は、流麗な表現に巧みで、兄の如亭とやり方を異にしている。この詩などが、そのいい例だ。しかし、詩の調べも、趣きも絶品であるからといって、元代の詩人たちのように軟弱な風もない。

○無題 通常、あえて「無題」と詩題を付ける場合は何らかのニュアンスを帯びるが、ここは漠然とした述懐という程度の意味。 ○

阿兄永日 阿兄は自分の兄を言う。柏木如亭をさす。永日はその字。

○異法 兄の如亭は晚晴吟社詩出版の翌年の享和元年（一八〇一）頃に葛西因是の影響で唐詩に詩法変換したと言われている。この時期に既に如亭は流麗とは目されていなかったことがわかる。 ○元

人孀弱 元の詩人の軟弱な詩風。

7 春遊

藤自南 弟来

【詩・本文】

此日與君出 此の日 君と出でて

鶯花海裏携 鶯花海裏に携ふ

吟眸天遠近 吟眸 天 遠近

醉脚路高低 醉脚 路 高低

行盡翠楊畔 行き尽す 翠楊の畔

經過紅杏西 經過こす 紅杏の西

看々乘興處 看々 興に乗ずる処

不覺到鷄栖 覺えず鷄栖に到る

【訳文】

この日は鶯が盛んに鳴き花が咲き誇る中に君を携えて出かけて来た。詩人の目には空の遠近が映り、酔人の足には道の高低を感じる。緑の柳の植えてある畦道を歩き尽くし、紅の杏の西側を通って過ぎてしまった。次第に興が乗ってきて、思いがけず鳥居のあるところに着いた。

○藤自南弟来 木百年の義弟の阿藤弟来。『如亭山人初集』に「阿藤弟来」の詩がある。 ○此日 どのような日か不明確。 ○君 何をさすか不明確。 ○鶯花海 熟した言い方。「萬金選勝鶯花海」（宋・陸遊、風入松詞など。 ○看々 みるみる。しだいに。 ○處 時。

○鷄栖 鳥居。神社の門。歩いていこううちに神社に出たという発想は『如亭山人遺稿』巻一「吉備雜題」その九にも見られる。 ○上

平声八齊・五律。

【評・本文】

一直寫下語意貫通、無半點之礙滯。此人之身分可以見矣。

(一たび直に写して語を下せば、意貫通して、半点の礙滯無し。此の人の身分、以て見るべし。)

【訳文】

事実をそのままに写して語を一回で決めるので、詩意は冒頭から末尾まで一貫して流れ、わずかに滞るところもない。こうしたところから、この作者の身分を垣間見ることができぬ。

○礙滯 とどこおること。 ○此人之身分 弟米は医師であり、それをさす。

8 柳橋聞鶯 矢伯玉 學遜

【詩・本文】

健筇輕履偶閑遊 健筇 輕履 偶ま閑遊す

草暖長堤綠澆油 草暖く 長堤 綠 油を澆す

柳蔭聞鶯暫停步 柳蔭に鶯を聞き 暫らく歩を停む

前回値雨此橋頭 前回 雨に値ふは此の橋頭

【訳文】

丈夫な杖と軽い下駄で、ふとのんびりと歩いてみた。日の当たる長く続く堤では草が暖かく照らされて、その緑は油のように輝いている。柳の木陰で鶯の鳴くのに聴き入ってしばらく歩みを停める。

そういえば、前に来た時に雨に降られたのはちょうどこの橋のあたりだった。

○柳橋聞鶯 柳橋は一般名詞か。江戸の柳橋か。 ○矢伯玉學遜 未詳。 ◎下平声十一尤・七絶。

【評・本文】

西湖柳浪、久想其境。不必求於此詩之外也。

(西湖の柳浪、久しく其の境を想ふ、必ずしも此の詩の外に求めざるなり。)

【訳文】

西湖十景の一つに柳浪聞鶯があるが、長いことその様子をいろいろ想像していた。しかし、それは必ずしもこの詩以外に求める必要はなく、この詩中に描き尽くされているのだ。

○西湖柳浪 西湖十景に「柳浪聞鶯」がある。 ○此詩之外 この詩さえあれば十分の意。

9 春夢 長自芳 蘭腸

【詩・本文】

微風淡月夜微茫 微風 淡月 夜 微茫

酣醉空眠六尺床 酣醉 空しく眠る 六尺の床

春夢驚醒人不見 春夢 驚き醒め 人 見えず

梅花如雪枕頭香 梅花 雪の如く 枕頭 香ばし

【訳文】

そよ風の中、月は淡い光を放つだけで、今夜はぼんやりとしている。そんな中、すっかり酔っぱらってそのまま六尺の寢床で一人で眠りこけている。はかないという春の夢からはっと覚めてみると、夢中の美人は跡形もなく、雪のような白梅が枕もとで名残のようによい香りを漂わせているだけだ。

○春夢 はかない春の夜の夢。はかない人生にたとえる。 ○長自

芳蘭腸 山岸蘭腸。信州中野の医者。 ○微茫 ぼんやりかすか。

○酣醉 ひどく酔う。快く酔う。 ○空眠 空は独り寝のニュアンス。

◎下平声七陽・七絶

【評・本文】

所謂人者淡粧美人。必得意場中之人。遽然不可復見。惘々悵々。

(謂ふ所の「人」は淡粧美人、必ず得意場中の人ならん。遽然として復た見るべからず。惘々悵々。)

【訳文】

詩中に言う「人」は白梅のような薄化粧の美女で、きつと望み通りの状況で出会った人であろう。一度は喜んだが再びは見ることはできないのである。残念残念。

○淡粧美人 白梅のごとき美女。『如亭山人藁初集』「桐公子淡粧美人図」がある。 ○得意 心にかなう。 ○遽然 驚喜のさま。一

度は喜んで二度とは見られなかった。 莊子の語。 ○惘々悵々 こ

の踊り字の読み方は惘悵悵悵。

10 幽居二首 高一魯 聖誕

【詩・本文】

求景何遊遠 景を求めて 何ぞ遠きに遊ばん

幽居總是詩 幽居 総て是れ詩

身閑時似病 身 閑なる時 病の似く

情倦處如癡 情 倦む處 癡の如し

貯水養魚子 水を貯て 魚子を養ひ

褰簾迎燕兒 簾を褰て 燕兒を迎ふ

箇場真得意 箇の場 真に意を得たり

長怕世人知 長に怕る 世人の知ることを

【訳文】

よい景色を求めるのにどうして遠くまで出かけることがあろうか。私の静かで奥まった住まいは、全てが詩なのだから。身体が閑な時は病を養う時のように何もせずに、気持ち疲れた時は愚者のように何も考えない。水を貯えて小さな魚を養ったり、簾を上げて燕の子を迎えたりする。ここは実に意に合った場所だ。ずっと恐れているのは、世間の人の知るところとなることである。

○幽居 詩佛の「山居十首」(「卜居集」)などの五律連作の影響下の

作品と見られる。 ○高一魯聖誕 高梨聖誕。信州中野における柏

木如亭の高弟。詩集に『紅葉遺詩』がある。 ○魚子く燕兒 魚兒

と燕子は「細雨魚兒出、微風燕子斜」(水檻遺心二首其一・唐・杜甫)

の例がある。 ○褰簾 簾をかかげる。 ○箇場 前の全てを受ける。

◎上平声四支・五律。

【評・本文】

三四、人々有此思。人々逢此境、只寫不得。聖誕能言之。可以想見其苦心矣。

(三四、人々、此の思ひ有り。人々、此の境に逢ひて只だ写し得ず。聖誕、能く之を言ふ。以て其の苦心を想見すべし。)

【訳文】

三四句は誰しも思うところである。誰しもこうしたことはあるが、ただ表現できないのである。聖誕はうまくこれを表現した。その苦心を想像すべきだ。

11 その2

【詩・本文】

學字手終倦 字を學て 手 終に倦み

因閑懶亦加 閑に因て 懶 亦た加ふ

飲伯斟新熟 飲伯 新熟を斟み

酪奴烹舊芽 酪奴 旧芽を烹る

闌風萬壑樹 闌風 万壑の樹

瑞雪一天花 瑞雪 一天の花

門前人不到 門前 人 到らず

時有數聲鴉 時に有り 数声の鴉

【訳文】

字を學んでいると終に手が疲れてしまうほどだが、急ぐ用事でもない

ので、また怠けてしまう。飲伯とも言う酒は新しく熟した新酒を斟むが、酪奴とか言う茶は去年の芽を煮て煎れば十分だ。秋の風が谷中の木を吹き、瑞祥の雪が空いっぱい花を咲かせるようになる。わが門には誰も訪ねる人も無く、時々鴉がいくらか鳴くのが聞えるくらいだ。

○飲伯 酒の異名。○酪奴 茶の異名。擬人法は『靜窓詩』に多い。

○闌風 夏秋の交に吹く風。涼風。止まずにふく風。◎下平声六麻・五律。

【評・本文】

三四、能以平易為奇險。宋人手段。五六、雄壯有餘。我邦人、少能言者。三四、能く平易を以て奇險を為す。宋人の手段なり。五六、雄壯、餘り有り。我邦の人、能く言ふ者少なり。)

【訳文】

三四句は、うまく平易な語で奇抜な表現とした。宋の詩人のやり方である。五六句は、雄壯と言って足りないくらいだ。我が国の人で、このようにうまく表現できる人は稀である。

12 自然 木壽 百年

【詩・本文】

小筵籬畔水潺湲 小筵籬畔 水 潺湲

幽竹疎松愜自然 幽竹疎松 自然に愜ふ

身世久抛高枕外 身世 久しく抛つ 高枕の外

風流每在短筇前 風流 毎に在り 短筇の前

磨烟明月宵呈鏡 烟を磨して 明月 宵に鏡を呈し

鑄雨青苔日供錢 雨を鑄て 青苔 日々に錢を供す

頑腹磊胸詩與酒 頑腹 磊胸 詩と酒と

天公容我執閑權 天公 我を容れて閑權を執らしむ

【訳文】

小さな竹の生垣のあたりに小川がさらさらと流れている。静かな竹林も疎らな松も、人が植えたものではあるが、あるがままの自然に適っている。我が身の一代は、高くした枕の向こうにとつくの昔に投げ捨ててしまったが、おかげで常に風流は短い我が杖の先にあるのだ。例えば、霧で明月を磨けば夜には鏡のように輝くし、雨で青苔を鑄造すれば、毎日錢を渡してくれる。丈夫な腹とものにこだわらない心持ちでいれば詩と酒を楽しむことができる。だから、天帝もこの静かな境を私が占めるのを許してくれるのだ。

○木壽百年 木數百年。信州中野における柏木如亭の高弟。詩集「靜窓詩」がある。○芭籬 竹の生垣。○閑權 末尾の「詩語「閑權」について」を参照。◎下平声一先・七律。

【評・本文】

三四、近自然。平々寫得為奇句。蓋、後苦心、中得之。五六、雖奇險、不失其體。百年於七律尤所壇場。於是見之矣。

(三四、自然に近く、平々、写し得て奇句と為る。蓋し、苦心の後

に之に中り得たらん。五六、奇險と雖ども其の体を失せず。百年、七律に於て尤も場を壇にする所、是に於て之を見る。)

【訳文】

三四句は、自然に近い表現で、平明な写生が良い句となった。おそらく、苦心の後にこの表現にたどり着いたのである。五六句、奇抜な表現ではあるが、バランスは崩れていない。七言律詩は木百年の独壇場だが、この詩を読めばその理由がわかる。

【跋文】

【本文】

今茲庚申之秋、天民詩兄訪予於信濃山居。留宿數十日、同社諸子、皆來謁。一香一茗、說花話月、暢懷殊甚矣。諸子、又、出所業、求言價焉。天兄、乃取而讀、々而選、々而評。不覺成卷。高木二生、相謀刻之、以附歸裝。山中白雲、聊持貽之也。舒亭山人晚晴草堂西窓書。

【訓読文】

今茲、庚申の秋、天民詩兄、予を信濃山居に訪ふ。留宿數十日、同社諸子、皆な來りて謁す。一香一茗、花を説き月を話し、懷を暢ぶること、殊に甚し。諸子、又、所業を出して、言価を求む。天兄、乃ち取りて読み、読みて選び、選びて評す。覺えず、卷を成す。高木二生、相謀りて之を刻し、以て歸裝に附す。山中の白雲、聊か持して之を貽るなり。舒亭山人、晚晴草堂西窓に書す。

【訳文】

今年、寛政十二年庚申の秋に、大窪詩佛、つまり天民詩兄が、私を信州の山居に訪ねてくれた。留まること数十日に及び、晚晴吟社の諸氏は皆やって来てお目にかかった。一つの香木と一杯の名茶だけで、花を語り月を話し、心をのびのびとさせること非常なものであった。また、諸氏は自分の作品を出して、批評を求めた。そこで天民詩兄は、取っては読み、読んでは選び、選んでは批評した。思いがけず、一卷とまとまるほどになった。高聖誕と木百年の両君は相談してこれを版木に刻して本として、それを帰路の荷物に加えた。山中の白雲というものは、陶弘景の詩のように本来持つて帰ることはできないが、いくらか持つてきてこれを贈ったと言えよう。この文は舒亭山人が、晚晴草堂の西書齋で書いた。

- 今茲庚申 寛政十二年(二八〇〇)。○天民詩兄 詩兄は敬称。年齢は大窪詩佛は明和四年(一七六七)生。柏木如亭は宝暦十三年(一七六三)生。○信濃山居 信州中野の柏木如亭の書齋、晚晴草堂。
- 一番一茗 序詩その2の「一鼎清茶一鼻香」と呼応している。
- 高木二生 信州における如亭の高弟、高聖誕と木百年。○山中白雲 「山中宰相」陶弘景「山中何所有、嶺上多白雲。只可自怡悅、不堪持贈君。」(詔問山中何所有賦詩以答詩・陶弘景)陶弘景は南北朝時代の道士、学者。○聊持貽之 前述の詩の表現をふまえる。
- 舒亭山人 柏木如亭の当時の表記。

補論 詩語「閑権」について

この木百年の詩に用いられた「閑権」という詩語は漢和辞典などに載らない用例の少ない語だ。意味は「閑かさを自分一人でもほしままにすること」と思われる。

注目されるのは、この詩語を『晚晴吟社詩』に深い関わりがある三人の詩人が同時期にともに用いていることである。三人とは、木百年(如亭の門人)の他、柏木如亭(晚晴吟社主権)、大窪詩佛(評者であり如亭の盟友)である。実際の句は

百年「天公容我執閑権」(自然) 寛政十二年(一七九五)

詩仏「箇中真是得閑権」(山居) 寛政十二年(一七九五)

如亭「溪山許可執閑権」(書懷) 寛政十二年(一七九五)

百年の詩はこの『晚晴吟社詩』に、詩佛詩は『詩聖堂百絶』に、如亭詩は『如亭山人藁初集』に収録される。この用例の少ない語がこれほど集中して用いられたのは偶然ではあるまい。

时期的にも三者は同年にこの詩語を用いた詩を作っている。この年の三者の動向を見ると、如亭は江戸を出て信州中野まで放浪した末に、当地の木百年の離れらしきところを借りて漢詩を教えていた。そして詩仏はやはり江戸からその如亭を信州中野に訪ねてこの『晚晴吟社詩』の編集などをしていった。つまり三者はこの年、同時に同場所顔を合わせて漢詩三昧の生活をしていたのである。その場所とは百年の離れとは名ばかりらしい茅屋「晚晴草堂」である。そこで三者はまさに「閑権」をほしいままにしていたことだろう。従つ

て「閑権」の語はそうした場の交流の中からそれぞれの詩に用いられたと考えられる。

ところで、『如亭山人藁初集』には異本として写本『如亭山人詩初集』がある。詩の配列はほぼ年時に沿っていると思われるが、「閑権」の語を含む詩「書懷」の数首前に、写本にのみ存在する「喜大窪詩佛見訪山居」の詩があり、如亭の「書懷」詩の製作時は詩佛訪問後、間もない頃らしいことが想像される。

しかし、この語は三者のオリジナルではなく、宋代の詩人林逋の詩句に既に存在している。「一門深掩得閑権」（城中書事）である。当時の江戸漢詩壇は唐詩の模倣を嫌ってむしろ宋詩に傾倒していて、この三者はその先鋒であった。従って、「閑権」の語は三者の交流から出来た造語とまでは言えないまでも、三者による林逋の詩の学習から実感に合わせて発掘された語ではないだろうか。こうした語を発見した時の三者の得意が想見される。

その後、「閑権」を用いた詩は散見される。佐羽淡齋の「日長眠儘得閑権」（初夏村居）『淡齋百律』文化十年（一八一三）、また牧棲碧の「閑権只道帰歸我」（胡麻溪居雜述十首）『詩牛鳴草』文政五年（一八二二）などだが、淡齋は詩佛や如亭の門人格であり、棲碧も詩佛や如亭のもう一人の盟友菊池五山に詩を学んでおり、時期的にも三者の影響下の作品と思われる。

また三者の本人たちも、如亭は「湖山静處執花権」（答人）『如亭山人藁初集』、詩佛は「許乘江山風月権」（六十二自賀）『詩聖堂詩集

三編』などのヴァリエーションをそれぞれ展開して、その詩境を拡げる一端としている。

注

(1) 中央詩壇と地方詩壇の閑権については、「五山堂詩話」に見る間野可亭——地方漢詩壇における役割——（『成蹊國文』43 2010-03）に述べた。

(2) 「大窪詩佛初期詩集にみる評語について——習作期における問題意識——」（『成蹊國文』44 2011-03）に述べた。

(3) 「詩聖堂百絶」注釈」（『成蹊人文研究』20 2012-03）71、81、84、99参照。

(4) 揖斐高「写本『如亭山人詩初集』について」『江戸詩歌論』